

ふるさと
令和4年度 手づくり郷土賞 大賞部門 (国土交通大臣表彰)
知床のガードレール雪かきプラス！
～真冬の避難・命を守るまちづくり～

斜里町ウトロまちづくり団体
しれとこ・ウトロフォーラム21 事務局 桜井 あけみ
さくら い

1. はじめに

北海道知床半島の真ん中、北側に位置するウトロ地域は、斜里町の総人口の約1割が暮らす集落です。町役場からは約40km離れており、主な産業の漁業と観光で暮らし生活しています。

国立公園、そして世界自然遺産地域である「知床」の知名度は、全国のみならず海外にまでいき渡っています。しかし、「ウトロ(宇登呂)」という地名と位置は、昨年(2022年)4月23日に起きた知床観光船事故により広く認知されたのではないのでしょうか。知床観光の海域利用における安全性への信頼をなくす事故となり、地域では忘れることのない、忘れてはならない大きな教訓として、その安全対策に今も取り組んでいます。

このようなウトロ地域を観光拠点として、コロナ感染の拡大前には120万人もの観光客を受け入れ、知床半島の雄大な自然環境を魅力とする景観と体験型観光を提供しています。また、漁業も、



図-1 知床半島ウトロ地域の場所

こうした豊かな自然環境がもたらす恩恵を受け、発展を続けています(図-1)。

また、ウトロ地域では生活する人たちの自治意識も高く、その取り組みの一つである「ガードレールの雪かきボランティア」活動で、令和4年度「手づくり郷土賞^{ふるさと}」の大賞をいただきました。こうした地域の活動で、大変喜ばしい賞を受けるに至った経過、背景について紹介いたします。

2. きっかけは「シーニックバイウェイ」景観も資源に

知床半島は、世界に誇る類いまれな景観と自然環境を有するなか多様な生態系が保たれ、多くの生き物が生息する魅力ある地域です。ここに暮らす誰もが、その価値に誇りを持ち、そして知床の



ガードレールの雪かきって？何やってんの？



自然の恵みに感謝しながら生業をたて暮らしています。しかし、一方では豊かな自然は厳しさも併せ持ち、生活する上では時として大変厳しい環境も有しています。

斜里市街地からウトロ地域までの道路は、半島基部からは一本道で、毎年11月からの冬季半年は知床峠が通行止めとなります。加えて、1950年代までは陸路の通行は十分ではなく、その安全性が確保されない状況が続きました。現在までに、海岸線を通る道路整備が進み、現在も整備が続けられています。

オホーツク海を埋め尽くす流氷の存在も大きな課題でした。船を全て陸に上げ、訪れる人のない冬季間は、ホテル、民宿は閉鎖され漁師さんは出稼ぎに行くという状態が続いていました。しかし、地域の観光に関わる方々で「冬季間も観光客に来てもらおう」と、1986年ごろから冬季イベントを企画開催するようになり、ウトロ地域の冬は変わっていきました。

厄介者でしかなかった「流氷」も、新たなアクティビティメニューが開発され、人気が出てきました。そんな頃、北海道開発局の主導する「シーニックバイウェイ北海道」事業が始まり、「ドライブの車窓景観も観光資源」というコンセプトが示されました。当たり前に見ていた「景色も大切な観光」という考え方が、地域の人々にとっては新鮮な響きだったことを覚えています。

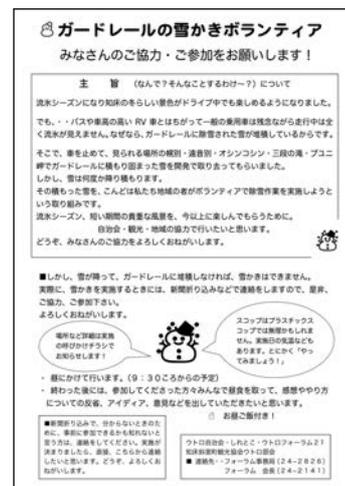
一方、ウトロに着いた観光客に「流氷が綺麗だったでしょう」と話しかけると、「ガードレールに積もった雪壁で気が付かなかった」という言葉が戻ってきました。雪道の安全性を確保するために丁寧な除雪をすればするほど歩道横のガードレールの雪壁は高くなり、視界が遮られる状態。「見てほしいよ！なんとかしたい」という声上がり、駐車帯のあるところだけでもガードレールの雪を取ろう！というのが、「ガードレールの雪かきボランティア」の始まりでした。

3. 官民の役割分担と連携で継続協働型道路マネジメント

当初（2008年2月）は、11名のまちづくりメンバーがスコップ持参で集まり、観光ポイントとなる駐車帯海側のガードレールの雪かきを実施してみました。なるほど、足元から海の果てまで流氷原がすっきりと広がります。雪かき後には観光バスの運転手さんが「雪かきしてあるところに差し掛かると、お客さんから『すごい！』と声が上がったよ。景色が違うねえ」と言っていました。また、観光客からも「いいね」と評価され、さらに、国道管理者、維持管理の事業者、観光関係者からも高い評価をいただきました。

そして、翌年（2009年）に地域の皆さんに向けて「ガードレールの雪かきボランティア」の開催チラシを配って呼びかけたところ、30名の参加者がありました。それから毎年2月、知床の海に流氷が来る季節にガードレールの雪かきを継続して実施することになり、その参加者は年々増えていきました（図-2、写真-1～3）。

なかには、こうした雪かきは行政の仕事だろう？という声もありましたが、地域の方々は、何よりもここの環境に誇りをもち、厳しい自然の中



こんなチラシで人が集まってくれるのだろうか？不安でしたが、30名から毎年増えて、コロナ前には200名を超えました。このチラシは2008年に出したものです。

図-2 雪かきボランティア募集チラシ



写真-1 2008年実施の雪かき



写真-2 雪かき後の避難訓練WS



写真-3 大勢の参加で賑やかに

で「折り合い」を付けながら暮らし生活してきました。安全や便利・快適さを求めてインフラは整備されていますが、時にその代償として景観が変えられ、環境が変わることも見てきています。

「雪が積もったら、雪かきするさあ」が、ここでの暮らしでは日常のことなのかもしれません。そして道路に関する地域の声を、こうした活動の中から拾う北海道開発局 網走開発建設部のサポートがあったからこそ、継続されてきたのだと思っています。地域につながる一本の道、それを管理する道路行政、地域の人たちが、かけがえのな

いインフラとして大切に利用する道路。その道路に、さらに付加価値を付けていこうとする、官民の連携、そこに必要なマネジメントは、こうした信頼関係の構築だったのかもしれませんが。

4. 雪かきはすごくシンプルでも、楽しい達成感

毎年、流氷の便りがロシア・アムール川から聞こえて来るころ「今年はいつやろうか？」との声が出て、その頃合いを図りながら地域にチラシを配ります。

スコップ持参で道の駅に集まり、雪かきをする沿道へ移動して作業を開始。小さな子どもから、最高齢は90歳のおじいさんまで！2010年ころからは、地域内の公共事業に携わる事業者も参加。作業終了後にはみんなで集まり、スコップは持たないけど協力したい、という「豚汁シスターズ」手作りのお昼をいただきながら、携わる工事の内容を地域の方に説明したり、道路に関する課題をヒアリングしたり、情報提供と情報共有をする場になっています。

こうした活動を楽しく、淡々と続けてきた2015年、私たちの活動が評価され、「流氷を活かすオホーツク流儀のおもてなし活動」として「手づくり郷土賞（一般部門）」を受賞しました。自分たちの、こんなシンプルな活動が評価を受け、嬉しかったですし、地域みんなの励みにつながりました。

5. ガードレールの雪かきプラス！命を守る 冬の避難訓練

ウトロ地区では、自治会組織の活動が活発です。2018年には自治会が「ウトロ地区防災計画」の策定をスタートしました。地域で、みんなの命を守る取り組みを、行政だけに頼らず住民自らで策定。避難マップも手作りで、全世帯に配布。また、津波等の避難時には避難場所へ車移動の「知床ルール」、国道トンネル上部を緊急一時避難所

などに、地域自ら動き協議して実効性のある計画を策定しています。

継続こそ有効と言われる避難訓練を夏だけでなく厳冬期も実施しては？という声を受け、「ガードレールの雪かきボランティア」の後に参加者と住民対象の避難訓練を2019・20年に実施。コロナ感染拡大の影響で2021・22年は中止となりましたが、活動の工夫が認められ、2022年「手づくり郷土賞(大賞部門)」を受賞しました(図-3、4)。

厳冬期の避難訓練では、冬期間ならではのさまざまな取り組みもプラスし、地域から求められる「リアルな避難訓練」を実施。電気自動車(EV)の活用方法、避難所運営の実践、勉強会などを参加者と体験。課題があれば、その解決を協議。コロナ感染が広がる中、雪かきはどうかと思ったらできるだろうかと協議を行い、集合はせずに7日間のうちで、各々が自由な時間に、間隔を取りながら予定箇所の雪かきをする「ソーシャルディスタンスな雪かき」を実施(写真-4)。



雪かきと避難訓練の流れです。全ての人の命をなくさないために。できることに取り組む地区防災計画です。

図-3 雪かき避難チラシ

6. おわりに ぜひ、冬の知床で ご一緒に!

今年、2023年2月4日には2年間中止されていた「ガードレールの雪かき」と「冬の避難訓練」がセットで実施されました(図-5)。「手づくり郷土賞」の大賞部門を受賞してから初めての開催に、162名が参加しました。おなじみの顔ぶれに混じって、ウトロ住民ではない方々の参加もありました。

また、ガードレールの雪かきボランティアの参加者には行政の方々も多く、北海道開発局、環境省や林野庁、いくつかの団体の方々も参加してくださいました。そして、私たちが「ウトロサポー



ウトロ地区防災計画では避難マップも作成。配布しました。

図-4 避難マップ



写真-4 コロナ禍での「ソーシャルディスタンスな雪かき」

ター」と呼んでいる、遠くから駆けつけてくださる方々の存在も大きな力となっています。地域づくり、まちづくりには、多様な視点が必要だということを、私たちはこうした「サポーター」の方々から学びました。

最近、夏に道路沿いに繁茂するオオイトドリ（比較的涼しい地域に生息する多年草）が視界を遮り、野生動物の飛び出しが危ぶまれ、車や自転車の走行の妨げという状況にもなることから、雪かき同様に住民も参加して「オオイトドリ刈る狩る作戦」を始めています（図-6）。

特にコロナ感染の拡大を経て、若い人たちの参加が増えてきたと感じています。大好きな知床ウトロに住む人たちが、それぞれのつながりを活かしながら、できる範囲で「折り合い」を付けながら参加する活動です。きっと、2024年の2月にも実施するはず！

ぜひ、冬の知床でしか見ることのできない景色を、一緒に雪かきをしながら楽しみませんか？ 私たち、大歓迎します！（図-7）



図-5 雪かきへの呼びかけ



この取り組みも「協働型道路マネジメント」から始まりました。6月に実施する沿道植栽ボランティアの後に、オオイトドリの繁茂を抑えるために行います。景観も大切なおもてなしです。

図-6 オオイトドリ刈る狩る作戦チラシ



図-7 知床ウトロでの活動